

秀 賞



ビリギヤルもどき

岩手県盛岡市立松園中学校

三年 松橋 美虹

底辺から頂点へ——。
私は今、成績学年一位という頂点に挑戦している。だが、成績学年一位に挑戦できるほど、私は成績がよいか。いいえ、むしろその反対だった。一年生の頃は——。

当時の私は、勉強が大大大嫌いだった。勉強より遊んでいた方が楽しいじゃんって、真面目に勉強をしている人を馬鹿にしていた。勉強時間は一日三十分未満で、宿題も一週間に三回位しか出さなかった。テストもほとんどが五十点前後で赤点もかなりあった。本当に底辺にいた。そんな私は、転校という転機を迎えた。

二年生になるとすぐに、新しい学校での実力テストを受けた。転校生として少しは印象を良くしようとして結構勉強したつもりだったが、自分でも驚くほどに点数がとれなかった。一日三十分しか勉強しない私が、春休み中毎日二時間も勉強して受けたテストなのにこんな結果はありえないと、ねちねち文句を言っていた。その時、学年一位の子が、「また二位か。でもそこまで勉強してないんだよね」と友達と話しているのを小耳に挟んだ。私は、「え、それ絶対めっちゃくちゃ勉強してるパターンじゃん、かっこよ

と思った。いつもなら「自慢かよ」と、ひがみを言っているはずなのに、その時は純粹に尊敬してしまっただのを今でもはっきり覚えている。

それと同時に、母にもちかけられた二万円の話が、私を変える大きなきっかけとなった。私のひどいテストを見た母は、「次のテストで四百五十点とったら一万円あげる」という話をもちかけてきた。きつと、私を勉強させるための手段がもう、「お金で釣ろう作戦」しかなかったのだろう。私はそんな母の気持ちもくんで、四百五十点は無理だろうけれど、勉強するきっかけになるならと、一万円の話に乗った。その日から、私の勉強漬けの日々が始まった。

しかしそれは、想像を絶する苦の日々が始まりでもあった。まず、スマホとの決別。私はテストが終わるまで母にスマホを没収してもらおうことにした。でも、「スマホが無いと生きていけない」と断言していた私にとって没収期間はとても苦痛だった。それに「大」がつくほど嫌いな勉強を一日三時間以上やるのも私にとって拷問でしかなかった。そんな日々を乗り越えていくうちに、一年生の頃は見ながらやっていた解答を見ずに、自力でワークを解けるようになった。どんどん日を重ねていくと、だんだんワークの満点が増えていき、私は、苦の中に希望を見つけた。

そして、テストを迎えた。結果は、四百四十六点で惜しくも一万円はもらえなかったが、学年八位という名誉はもらえた。「底辺脱出！」もちろんそれも嬉しかったけど、四百四十六点という点数が一番嬉しかった。一教科ごとのテストに、自分がとったことがない高い点数が書かれていた。自分のテストか何度も名前を確認するくらい信じられない点数だった。それに学年八位。こんな名誉をもらえるなんて思ってもみなかったから、達成感でいっぱい

だった。皆が褒めてくれるから、優越感でいっぱいだった。目立つような取り柄がなかった私にとってそれらは快感で、一万円をもらうよりもずっとぜいたくなものだった。

でも、欲張りな私は、八位で満足するような女じゃなかった。「最初から八位なんて望んでいなかったくせに何様だよ」って本当に自分でも思う。だけど私、美虹様だから、満足しないと気が済まない女だから、「学年一位をとって革命を起こしたい」と強く望んだ。そして、私を見下した人を見返してやる、そんな一心で、目標を「学年一位」に定め、勉強に励んだ。順位を上げたり下げたりを繰り返して、三年生になってやっと学年二位をとることができた。

私は、二位をとってわかったことがある。それは、周りの人の支えの大切さ。まず、私を変えるきっかけをくれた母、私が勉強に集中できるような部屋を作ってくれた父、応援してくれる弟という家族の支え。丁寧な指導をしてくださる教科ごとの先生方や、いつも励ましてくれる友達への支え。私を奮立たせ、高めてくれる私にとって最も大きい、ライバルたちの支え。そんな多くの支えがあったからこそとれた二位。一人じゃ絶対とれなかったし、学年一位を目指せていなかった。だから、私を底辺から引きずり出して、頂点を目指す今の私を支えてくれる方々に感謝しかない。

私は今まで、自己満足のために学年一位を目指していたけれど、今は、私を支えてくれる人、応援してくれる人のために、一位をとりたいと心から思う。もし、一位をとれなくても「完全燃焼した」と言えるように全力を尽くす。努力は必ず報われることを信じ、元底辺の私は今日も頂点に挑戦し続ける——。